

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	號外事件：回顧
Author(s)	江口，俊博
Citation	龍南會雜誌， 1 3 7： 1 2 8 - 1 3 2
Issue date	1910-11-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6100
Right	

回顧

號外事件

自第一回雜誌部委員 江 口 俊 博
至第四回雜誌部委員

龍南會雜誌が創刊より二十年も經過致候由夢の如き心地致候小生は龍南會創立の際誤て委員に擧げられ扱
屬別けの互選の場合に至て小生一人適當の所屬なき爲特に決選投票が行はれ江口は寧武人ならん江口君は生
父の方が抔云ふ滑稽な投票に翻弄せられ確か一票か精々二票位の違ひで雜誌部委員に掃き込れたが縁にて
れより引續き數年間雜誌部に居候となりとのみにては今の諸君には少し工合が御分り兼ねかも知れずと存候
へども小生入學の時分は本科豫科補充科と云ふ三階級有之小生は補充一級に入學したれば順當に卒業して
六ヶ年の在學を要するに小生はこれに加えて二度も落第致候爲通じて八ヶ年の在學なれば彼是五年は雜誌部
に坐り込んだ様な次第夫故龍南會創立以來小生程長く雜誌部員を勤めた人は可無之夫と同時に雜誌部委員に
して小生程雜誌の發刊に役に立たなかつた者も有之間敷と存候夫は其筈にて本來が武人か文人か抔云はれ
程曖昧な人間故雜誌の編纂だとか言ふ様な専門的な事の出來様筈もなく何時でも小生少しも知らぬ間に雜誌
は立派に印刷迄出來上つて持込まれる位の有様小生は仕方がないから極り悪るゝふに何級か何部何級か何部
と數へ分けて札をつけ抔して茶を濁したものに御座候如此役には立だざりしも長年關係したので今回二十
年の記念號御發刊の御通知に接した心持は忘れるともなく後庭に遺棄し置きたる球根が何時となく芽を吹い

て立派な花が咲いたのを思ひ掛けない時に氣がついたといった様な懷敷感だが致候然れば小生は只今過去に學當時の生活を回想し面白かつた事愉快だつた事苦しかつた事不平だつた事がゴラマの如く眼前に展開する居候小生に取ては其中ドレー一つ取ても棄て難き興味を覺へ候へども其當時に關係なかりし多くの諸君に語ては何等の趣も添ゆる能はざる事多く且又多少は諸君の喝采を博し得べき事柄とても小生の如き武人とも文人ともつかぬ様な人間の拙い筆先きにかくれば頓斗興も醒めて仕舞ふ仕合せ故一切を掃き捨て只一つ雜誌部が氣焰を吐き過ぎて物議を醸し會長から大目玉を頂戴した所謂號外事件なるものを御話致し以て初期の龍南が如何な性質を帶びて居つたか又其頃の學校の氣風が如何にありしかを偲ふの料と致し度と存候何年頃だか忘れ申候今の東京高等師範學校長をして居られる嘉納先生が會長をして居られし時代に御座候其時分東京の第一流の或實業家の坊ちゃんと大阪の或有名な病院長の御息とかを在學致居られ候處二人共金に不由のない身分夫れに都會でチャンと修業濟の剛の者共なれば殆んど生蕃人の様な亂暴な思想が横溢して居る地方だと云ふことも考へずに金ヅラ切て段々遊興を逞うしたらしく夫れが學校や保證人の耳に入りこれは變なりと云ふので早々親許へ追ひ歸し學校は夫れとなく依願學退と云ふ扱ひになつたんでふに御座候何此頃の風習書生が女に關係した風聞でもあるものなら直ぐに裏の小松原へ多分今は大松林となり居ると思ふに引出されて煩桁をウンと見舞ふかひざいのになれば業々敷も瑞邦館(今もあるやら)に引出され衆人稠座の中で足蹴にかけられたものに候夫れで右の二人もこんな騒ぎになつては笑止と云ふ遠慮から學校の方では極めて機敏に處理された譯と存候乍併これを聞き込みたる若手の面々何條承知致すべき御誂に通に激昂し物議囂然何故に學校は然様な醜漢を處分せざりしやと云ふ騒ぎに相成候不幸にして兩人が揃ふて

家名流の坊ちゃんでありし丈學校は痛くもない腹を探られた勘定に相成聊か始末が悪い趣もありし事と今では考へられ候此時に方り小生等は小慧しくも心血を絞りて一策を案出致し候は外ならず學校は已に處分され云ふものを今更足摺したとて追付くべきに非ればかゝる時の用意にとて密かに龍南會に與へあるアノ非當權を振り廻すべしと云ふ話を持ち出し候非常權と申すは即龍南會除名の事に候此處一寸説明を要し候は抑も龍南會創立の初創立委員たる生徒員今秋田の事務官をして居る藤本、東洋拓殖の理事をして居る林死んだ如藤總領事杯云ふ豪傑諸君だつたと記憶すは他の諸學校にもある例で校友會と命名する積にて嘉納校長にも相談した處が校長の曰くには校友會杯云ふ通り一遍の名にては形式的の會合の様な氣持がして會に對する熱を高めしむるに足らず且又如何にも會が貫目不足に思はれる依て何か此處特有にして萬代的の佳名を撰びたいと云ふ事であつた様子に候そこで生徒間でも先生間でも段々研究された結果龍田山の面に位置するから飾りもなく龍南とやつたらば飽迄素朴な處に厚味があり厭味がなく萬代的だと云ふので校長も嘉納せられて遂に命名された譯に候夫れで創立後第一回の委員會の時に何だか劍橋大學當りの此種の會が長く同窓生組合の中心になつて居て學校の大事は多く此會の意見にて定まる杯極めて羨望すべき組織なれば本會にも然様の傾向を持たせたい云々の話があつて……だから本校生徒は必ず悉く本會員とならねばならぬ苟も本會より除名せられし程の人間ならば只其實實次に本校退學の原因とすべしと云つた様な踏込んだ話も御座候間も事情が纏綿したり確証が擧らなかつたりして學校として公然の處分を爲し兼ねる様な場合に龍南會が情知判斷により會員たる名譽を保維し得ざる男として除名の決議を爲すに於ては學校はこれを理由に公然の處分も仕様と云ふ嘉納先生の意氣を示されたるに候夫れで今度は逆施倒行で學校の方は已に退學開居で手のつけ

様はないから幸いまだ退會未済の龍南會は此非常權を振廻して二人者を春秋的に罰追（こんな言葉もあるまいが）してやるふと云ふ次第に候かくて愈これに關する役員會總會が開かれ申候處軟派やら硬派やら溫健派やら一刻派やら議論紛々此事件は苦もなく大多數にて役員會を通過する物と信じ切て居た小生等は當時マッカヘリの蠻骨組を代表して居た事とて此形勢を見て大に驚き必死になりて大義名分を怒鳴り立て候處擊劍部長として在席し居られた故秋月老先生が徐ろに班白の髭を撫してコラ／＼江口餘り八ヶ間敷云ふと前の方の側も承知せぬぞと云ひ放て莞爾として笑はれたので小生も機鋒頗る鈍りたれど今更オメ／＼引下がる譯にも參らず意氣地から血眼になり覺悟の前に候余人は知らず拙者一分に於ては尙も分桃の蠻行あらば甘じて老公の誅を受くるも辭せず杯火の様になつて見たれど僅かの差にて遂に負け申候夫れからが事に候ひき何れも罰追派たりし雜誌部の委員今朝鮮の學部に居る隈本夫れから東京に居る白河鯉洋夫れから小生と負けたのだが如何にも心外で堪らぬので恰も雜誌發刊期なりしを幸ひ鯉洋が書いたか隈本が書いたか忘れたが全校生徒に檄すとか云つて頗るつきの悲憤慷慨な文章を書き單葉の附録にして一夜に刷り上げさせ雜誌と共に配布した譯に候是に於て學校は色めき立ち手段の辛辣を痛快がるもの雜誌部委囀の專横を非議するもの甲論乙駁の間に隈本と鯉洋とは交々校長や秋月老師に呼ひつけられて毒氣を抜かれたらしく小生は本來雜誌部の雜輩と目せられ居候事とて頓斗は構ひなければ反響が思ひの外に大きくなつたのが愉快で堪らず獨笑坪に入り鯉洋や隈本に構ふもんか降参するな退校さるゝ覺悟でやれ杯と尻押して得意がり居たる内に如何に話合がついたか號外の頒布停止と會長の御目玉丈で手輕に埒明き申候これを其當時號外事件と稱して面白がりたるにて候現在在學の諸君等はかゝる話を聞かれては眞に隔世の思ひをせらるゝ事と存候何ぞ申しても二十年ぶた昔

の事に候へば人心の變移尤もの事と存候實に其頃の小生等はかゝる大義名分の問題が一番興味を感じ居申候爲此細な事にも腕まくりして議論を始め其都度先生方に不鮮御厄介をかけ候事今更汗顔の至り其酬ひにても候べく小生は思ひもかけぬ『先生』に打なり今度は反對に目々小豪傑諸君にイビリ廻はされ居申候夫れは兎に角當時は實にこんな他愛もなき事に力瘤を入れて騒ぎ居つたせいかな今の若い諸君に比して何れも人間が鷹揚であつたかと存候これに比ぶれば一点二点の点数も仇には見す少しでも良く卒業して他日の就職難を輕くして置かねばならぬ杯の近日の學生諸君は御氣の毒見た様に被存候何でも世の中は日進月歩に相違なければ書生する身から申せば明治以後なら一年も前の方がよかつた様に存候は矢張婆様の昔最負と申すべきや小生の經驗にては只今迄の生活中第五に在學して居つた時代程上下左右に隔意のない明け放しの爽快な生活は無之候其頃の人に會へば先生たりしと生徒たりしとを問はず何となく多少血脈でも續いて居る者と會する様な感が致候昔思ひ出しつゝ無駄話が長く相成申候餘り懷敷の所思はず無遠慮に申上候御採録の餘地も御座候はば御掲げ被下度本懷此事に御座候拜具

狐

狩

第五回雜誌委員

飯田 御世 吉郎

僕が學んだ熊本の第五高等學校は、龍田山といふ岡の麓にある。丁度また近邊に白川といふ流があるので、何かといへば此山と河は、何時も引合に出されたが随分難有迷惑もしたらうか、又かゝと小うるさと思ふこともあつたらう。演説にでも、雜誌にでも、祝詞、祭文にでも、乃至は學校の作文にでも、或は「龍山白水」に